



恋と愛のその間には【一】

あずま渡里



# 恋と愛のその間には【一】

あずま渡里



## 第一話

引退した後の、それでも契約は継続すると息巻くスポンサーとの会食の帰り。

普段は縁のない街並みを歩いていた僕の視界の隅で、ひらりと綺麗に動いた指先が目に残る。

視線を向けると、ショーウィンドウで男の子が踊っていた。

それが最後の舞台での、自分のプログラムだと気づいて僕は近づいた。スケートリンクとは違う、限られたスペース。流石にジャンプは飛べないようだが、僕を真似た美しく丁寧な踊りに、気づけば魅入られてサングラスを外していた。

刹那、旋回した男の子の琥珀色の目が僕を捉える。

途端に男の子は真っ赤になり、ショーウィンドウに張りつきながらも僕を見上げた。涙ぼくろが可愛い。

……そしてつまらない筈の僕に対して、会えて嬉しくてたまらないというような、満面の笑みを向けてきた。

「奇跡だ」

僕の耳に、驚いたような感心したような呟きが届く。

声の主である、チャイナ服を着た男は「ちよっとお話しようか!」と僕を店に連れ込んだ。途端、高そうな服に身を包み、目を閉じた女の子達が並んでいるのを見て、何の店なのかと眼差しで男に問いかけた。

「ブランドールって知ってる?」

「……聞いたことはある」

問いかけに問いかけで返されて、つ、と眉を寄せながらも僕は答えた。

子供の頃、僕の容姿を表現する時に何度か言われたことがある。生きている人形。愛情を糧にする存在——目にするのは初めてだが、ここにいるのはその『プランツドール』なんだろうか？

(だとすると、さっきの子も？)

ショーウィンドウにいた子を探すと、男の子は男の後ろへとやってきて、隠れつつも僕を見上げてきた。

年の頃は七、八歳くらいだろうか？ 明るい色の髪と琥珀色の瞳。白いシャツと、ブラウンチェックのベストとハーフパンツ。確かに人形のようにもあるが、七五三にも見える。他のプランツドール達とは異なり、可愛いが目を瞠る程の美形ではないけれど——あの踊りと笑顔を見たら、とても他のプランツドールになど目はいかない。

そんな男の子の頭を撫でながら、男は言った。

「僕は、店主の加護耕一。そしてこの子は、プランツの司くん……テレビで、夜鷹選手のプログラムを見て目覚めたんだ。直接会わないで目覚めるなんて本来、ありえないんだけどね。ただ引退するとなると、テレビで見られる機会も減って司くんは枯れるしかないと思ってたから……夜鷹選手がきてくれて、本当によかったよ！」

「引退したから、選手はいらない……枯れるって、何？」

「じゃあ、夜鷹くん……枯れるって言うのは、人間の『死』だね。プランツって持ち主を選んだらその人以外、見向きもしなくなるんだ。ただ司くん、僕が手配するから直接会おうって言っても『勝手に目覚めたのに、高い買い物なんてさせられない』って思ってるみたいで、拒否するし。このまま愛情貰えなければ枯れるから、メンテナンとして忘れさせようとしても拒否するし」

あつさりともんでもないことを言われて、僕は『司』と呼ばれた男の子を見た。はにかんだ笑顔を向けられたが、僕を選んだくせに急に遠慮して死のうとしていたなんて冗談じゃない。

（あんな風に笑いかけたのに、死ぬなんて）

会ったばかりだが、僕は彼を手に入れたと思った。顔には出ていないと思うが、考えていることが伝わったのか店主が笑顔で言う。

「ここで会ったのは、まさに奇跡！　ねえ、夜鷹くん？　無料<sup>タダ</sup>でいいから、司くん引き取らない？　あんまり、おまけはつけられないけど」

「言い値で払う」

おそらく、司に今までのように遠慮させない為の気づかいなんだろうが——僕としては、無料より高いものはないと思う。あと、この飄々とした男なら大丈夫かもしれないが、無料で引き取って後から返すよう言われても困る。

だからそう言ったら、途端に司が真っ青になって固まった。次いで、音のする勢いで首を横に振る。

「司」

「っ!？」

名前を呼ぶと、驚いたのか司は首を振るのをやめた。そんな彼の前でしゃがみこみ、琥珀色の目を覗き込みながら僕は言った。

「君は僕を選んだ。僕も君が欲しい。一緒にいる為に必要なことだから、観念して」

「……っ」

「夜鷹くんの方が、よっぽどプランツらしいね」

僕の言葉に司は真っ赤になり、店主が面白そうに言う。確かに自分がプランツドールなら、選んだ相手と暮らす為なら買われることも、その為に相手に金を出させることも躊躇しないだろう。

(もしかして、自分の価値が解らないのか？ あんなに綺麗に踊るのに)

僕のプログラムではあるけれど、真似をしてはいけるけれど——自分のスケートはつまらないとは思えないが、司の踊りは本当に綺麗だった。僕のスケートを見て目覚めたらしいが、スケートには興味があるだろうか？ 興味があるなら、彼にピッタリのスケート靴を用意しないと。

そんなことを考えていた僕に、店主がふと思いついたように尋ねてくる。

「プランツには一日三回、温めたミルクが必要なんだけど……夜鷹くん、そういうの出来る？ あ、レンジじゃなく、鍋でね」

「……………」

「強火で一氣にじゃなく、ゆっくり……温めるのを人に頼まないで……君がやるん、だけど」

「解った、やる」

その質問に最初、僕は答えられなかった。いや、無言が答えになっていたらしく、店主の言葉は気まずそうに途切れて消えた。マズい。このままだと、僕が司を手に入れるのを断られてしまうかもしれない。

そんな訳で、僕はキツパリと言いつつ。そして、スマートフォンを取り出して——会食の後、苛立つて壊していた為、店主に店の電話を借りて唯一、電話番号を覚えている相手に電話をかけた。

「もしもし、慎一郎くん？ ミルクを鍋で温める方法を、教えてほしいんだけど」

## 第二話

プランツドールは、職人の苗字を自分の苗字とするそうだと、慎一郎を待つ間に加護から教えて貰った。

ちなみに司は、加護の妻と別れの挨拶の最中だ。二人きりになったところで、加護は僕に司の過去を教えてください。

「司くんを作った職人は、彼を作り上げてすぐに亡くなったんだけど……司くんを引き取りに行った時、職人の家族や親族は眠っている彼に酷いことを言ってたんだ」

何で、こんな冴えないモノを作ったのか。

今まで作ったプランツドールは、あんなに素晴らしかったのに。

出来損ないに、価値はない。店は引き取ってくれるが、きつと売れ残って廃棄される。

きつと死ぬ間際に、毫碌したんだろう。

「眠っていても、プランツドールにはこちらの声は届いてる。だから司くんは、自分に価値なんてないって思ってるんだ」

「くだらない。司の踊りを見ていないくせに」

腹が立つが同時に何故、あれだけ僕にお金を出させることに抵抗を示したのかを理解した。そんな僕に、加護は更に司の秘密を教えてくれた。

「そう、司くんは『踊るプランツ』ではあるんだけど……君のプログラム、一回見ただけで覚えたんだよ。同じ『踊るプランツ』でも、他のプランツは『元々、教えてあるものを踊る』だし『新しい踊りは練習が必要』なんだけど……多分だけど、君にも同じことが出来るよね？」

「……調べたんだ」

「司くんが選んだ相手だからね。インタビューとか読んでももしかしたらって思って、ますます君達を会わせなくちゃって思ってたんだ……司くんを、よろしくね」

「解った」

その話を聞いて、加護が「奇跡だ」と言っていたのを思い出した。

自分以外に初めて会う『鷹の目』を持つ存在に対して、価値がないなんて冗談じゃない。だが、同じ『鷹の目』を持つ僕と出会ったのは、確かに『奇跡』だと思って領いた。

「純くん」

「慎一郎くん」

話を終えた後、ちょうど良いタイミングで慎一郎くんが来てくれた。

そんな彼に先程、プランツドールを購入することになったことを伝えると、驚きつつも嬉しそうに言われた。

「車を出すよ。ミルクパン……ミルクを温める鍋も、持っていくね」

しかも到着してすぐに、加護から買ったおまけで貰った服やミルクを車に積んでくれて、本当に僕には出来すぎた良い友達だと思う。

そうこうしているうちに、別れの挨拶が終わったのか司が一緒に来た女性と女の子から離れて、僕のところ

やってくる。そしてピタツと止まり、僕が歩き出すのをにこにこ笑いながら待った。  
こういうものなのかと加護に目をやると、やはり違うようで苦笑が返された。

「プランツドールの何よりの栄養は、愛情だから。移動の時は、花嫁を抱くように抱き上げてあげてね」

「っ!？」

「うん」

「っ!？」

途端に真つ赤になった司が、加護さんと僕の顔を見比べて固まる。一方、僕は硬直してくれたおかげで、抵抗なく抱き上げることの出来た体の熱さに驚いた。

「この子、熱ない？」

「あ、司くん平熱が三十七度だから大丈夫」

「そう」

疑問への答えに安心すると、司も大丈夫だと言うように首を縦に振り拳を握った。プランツドールは基本、話さないらしいが司の場合、表情や動きが十分賑やかだ。もつとも他の連中のように、煩わしいと思わないので本当に司は特別なんだと思う。

その後、慎一郎くんの車に乗ってきた加護は、プランツドールに対する注意を説明してくれた。もつとも、僕の方を見ずに運転席の慎一郎くんに説明していた。よく解っていると思う。

加護と慎一郎くんが車から荷物を運んでくれたので、僕は司を抱いて自分の家に帰った。

そして加護の帰宅後、慎一郎くんに教わって僕が温めたミルクをカップに入れて運ぶと、司はまた思いがけな

いことをした。

お礼を言うように僕に頭を下げたかと思うと、笑顔で湯気の立つカップを僕に差し出してきた。僕のように、食事自体が嫌いで飲みたくないのかと思ったが、不機嫌そうではないし全く悪びれてもない——これは、もしかしたらだが。

「美味しいからって、純くんにお勧めしてるんじゃないかな」

慎一郎くんも同意見らしくそう言うと、正解だったらしく司は笑顔でコクコクと頷いた。

……まあ、固形物ではないしと温めたミルクに口をつける。そして少し飲んで口を離すと、司はにつこり笑って両手を差し出してきた。それから、受け取ったカップに躊躇なく口をつける。

ちゃんと人肌に温めたブランドール用のミルクは、僕は味が少し濃いくらいとしか感じなかったが、司にとつては美味しかったらしい。琥珀色の目を輝かせ、笑みに頬を緩めて残り全部を飲み切った。抱っこは照れるが回し飲みは照れないし、抵抗もないらしい。むしろ満足そうなので、おそらくだが今後も毎回やると思う。

(面白い子だな)

一方、僕も司限定だがミルクの分け合いに抵抗はない。とは言え、僕が飲むとその分、司が飲むミルクが減るので、次からはもう少し大きいカップにしよう。

そう声に出さずに決意した僕は、慎一郎くんがニコニコと微笑ましく僕と司を眺めていたことに気づかなかった。

## 第三話

僕の家にはピアノがある。

子供の頃に習い、親に買って貰ったものだ。流石に簡単に壊せる大きさではないし、手入れをしないと音が酷いことになるので、定期的に調律して貰っている。

司に買ったものを部屋や浴室に置いていると、司がそのピアノを見つけた。無闇に触らず、ただ「カッコいい」と言わんばかりに目を輝かせている。そんな司に、僕は声をかけた。

「弾く」

「っ！」

「だから、踊って」

「っ!？」

前半は笑顔だったが、後半は「何で!？」とショックを受けた顔になった。踊りを見られること自体には思ったよりも抵抗がなさそうだが、どうも「え？ 大丈夫!？」「もちろん代価は払うべきだけど、ファンサがすぎない!？」と思ってるようだ。喋らないのにここまで伝わるなんて、つくづく規格外である。

だけど僕にピアノは弾いてほしいようで、すごいしかめっ面で悩んでいたが、やがて悲壮感漂う顔で頷いた。こういう顔をして嫌な気持ちにならず、逆に可愛いと思えるのだから、司は本当にすごいと思う。

「純くん」

「慎一郎くん、動画」

「あ、ああ」

展開に戸惑いつつも、慎一郎くんがスマートフォンを構えてくれる。それを見て、僕はピアノを弾き始め――司が、さっきの僕のプログラムを踊ってくれた。

……僕を真似して、スケートを滑る奴はいる。

だけどそんな連中と、司の踊りはまるで違った。店で踊るのにスペースは限られていただろうから、その場からあまり動かすジャンプの回転数もない。でも綺麗に丁寧に、司はピアノに合わせて僕のプログラムを踊りきった。そして僕を見て、さっき初めて会った時と同じ笑顔を向けてくれた。

だからピアノを弾き終えた僕は立ち上がり、近づいて司の頭を撫でた――さっきは、ショーウィンドウに阻まれて出来なかったから。

「司くんは純くんが好きで、このプログラムが大切なんだね」

「？」

ピアノの椅子に座らせた司は、楽しげに鍵盤を押してポン、ポンと音を鳴らしていた。その音をBGMにして撮った動画を見せてくれながら、慎一郎くんは感心したように言った。どういふことかと目で問うと、慎一郎くんは笑って答えてくれた。

「司くんは、己の持つ技術全てを使って踊っていた。つま先から指先まで丁寧に、司くんがこのプログラムを綺麗だと思って、可能な限り表現したからだ。まるで、宝物を大切にするように……愛がないと、出来ないよ」  
慎一郎くんは言語化がうまい。なるほどと思ったが、ふとあることに引っかかる。

「プランツドールは愛を糧にするのに、僕になんかくれていいのかな？」

「なんかって言わない。心配なら、純くんも貰った分返せばいいよ。そうして満たせば、なくならないだろう？」

「……そう、かな？」

「そうだよ。これからミルクだけじゃなく、お風呂を入れたり一緒に寝るのも純くんだから……あ！　いくら司くんが欲しがっても、ミルクと週一の砂糖菓子、あと香り玉以外はあげちゃ駄目だよ。それ以外を口にしたら、枯れちゃうからね」

「……………」

「ちゃんと返事しないと、この動画パソコンに送らないよ？」

「うん、解った」

普段、シャワーで済ませてソファで寝ることのある僕としては、不安があつたが——圧のある笑顔で続けられた言葉に、僕はしっかりと慎一郎くんに戻事をした。

※※※

慎一郎くんが帰った後、心配していたような残念なことにはならなかった。

と言うか、司が良い子すぎた。体もだが、髪も慎一郎くんがくれたシャンプーパットを使って、自分で洗った。むしろ、プランツドール用のシャンプーやボディソープで、僕の背中や髪も洗ってくれた。

浴槽に僕らと、あと慎一郎くんがくれたアヒルと一緒に入る。そうすると、司と僕は同じ香りがして何だかとても沁み入った。

風呂上がりには、プランツドール用の化粧水やリップクリームを司に塗る。可愛い涙ぼくろにも触れられるの

で、気に入った。これから毎日、続けようと思う。

そうするとミルクや入浴の時のように、司は僕にも同じように塗ってツヤツヤにして満足した。

……プログラムもだが、どうやら司は僕自身も大切にしてくれるらしい。

「おやすみ」

一緒に眠るのにパジャマを着せた司を抱き上げて、僕のベッドに降ろしながら言った。

そんな僕の胸に、司は「おやすみ」というように頭を埋めた。嬉しくてそっと抱き締め、腕を回したまま一緒に横になると司のぬくもりや鼓動が伝わってきて心地好かった。

僕は、氷の上を居場所にしかかった。冷たい風が肌にあたる時、自分が生きているのだと感じた。

でも、氷の上で僕は一人だった。慎一郎くんは友達で理解者だけど、僕と全く同じ熱量ではない。慎一郎くんですらそうなんだから、他の連中は尚更だ。僕を妬んだり、勝手に挫折したり、逆に神格化したりするだけだった。

寒いのと寂しいのは似ている。最初は辛くても、次第に凍りついて何も感じなくなる。

もう、氷の上でも生きているとは思えなくて僕は引退した。とは言え、死んでいる訳でもなかったので、命を縮めるように煙草を吸ったりした。

そんな僕が、司と出会った。初めてスケートを知った時と、同じくらいの衝動を感じた。

司は、僕を温めてくれる。氷の上から降りた僕にも、笑いかけてくれるし生かしてくれる。

今までは、大切なものを焚べて氷の上にいたけれど、司を焚べるつもりはないし——そんなことをしなくても、司はその愛情を惜しみなく与えてくれる。むしろ、僕が心配になるくらいに。

慎一郎くんは教えてくれた。貰った分は、返せばいいと。そうして満たせば、なくならないのだと。

選手として、復帰するつもりはない。だけど司がいてくれたら、僕は氷の上に戻れる気がする。このぬくもりが傍にあれば、氷の上でまた風を冷たく感じられる気がする。

「今度、慎一郎くんに頼んで夜のスケートリンクで滑る……司も、一緒に来て」  
「っ！」

反応が少し怖くて、顔を見ないように抱きしめたまま言ったら——司は弾かれたように飛び起き、次いで花が咲くように、いや、光が射し込むように笑って頷いてくれた。

嬉しくて愛おしくて、僕は再び司を抱き寄せてその頭を自分の胸に埋めた。

我知らず微笑んでいたことを、僕は知らない。

その後、僕は普段の食事（サブリや鶏肉）の他に、栄養価の高いブランドル用のミルクを司に付き合つて三食少しずつだが飲んだ。そしてブランドル用の高級な化粧水やシャンプーなどを一緒に使い、夜は司を抱き締めてそのぬくもりを堪能しながら眠った。

あと、司自身は僕の喫煙を咎めなかった（むしろ見惚れていた）が、煙草の煙は司には良くないものだったので、よっぽど苛立った時以外は吸わなくなった。

そんな健康的な生活を送ったおかげが一週間後、夜のスケートリンクで会った慎一郎くんは肌艶の良くなった僕に感激した。

それから、抱っこしていた司に大きな体を九十度に曲げてお礼を言い、司を恐縮させるのだった。

---

---

## 恋と愛のその間には【一】

発行日 2026 年 8 月 8 日

著者 あずま渡里  
<https://www.pixiv.net/users/3229042>

連絡先 [contact@rainbow.sakura.ne.jp](mailto:contact@rainbow.sakura.ne.jp)

印刷 シメケンプリント / かんたん表紙メーカー

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。

---

---